

国際的冒険プログラムを体験した参加者の自己の成長に関する研究 ～視野の広がり注目して～

間苧谷 育生 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)
指導教員 林 綾子

キーワード：国際的冒険プログラム 視野の広がり 自己の成長

1. 序論

現在、人口 70 億人が住む地球環境では、国際的な問題を多く抱えている。今後、それらの問題の解決に取り組まなければならない若者にとっては、グローバルな視野を身につけることが必要とされる。グローバルな視野を獲得するためには直に国際的な交流をすることが必要とされ、「自らの肌で触れ、体験することで得られる感動こそが、学習、成長における最高のパターンであり、その中でも、国際教育交流は非常に重要な役割を担っている」と述べられている(劉, 2004)。

本大学の野外コースで国際的交流を体験できる機会があり、筆者は自己の成長を図るために、2010年3月9～16日の期間、台湾の学生と日本の学生が合同で行う国際的冒険プログラムに参加した。その「国際的」「冒険的」な要素を含んだ体験を通して、筆者は自己の成長として視野の広がりを感じた。国際的な体験をすることで人の成長が促される研究は多くされてきたが、冒険的体験が含まれた国際的な体験に関する研究は少ない。そこで、本研究では、国際的冒険プログラムの参加者が自身のプログラム体験についてどのように理解しているのかを明らかにする。また、体験から自己の成長をどのように理解しているのかを明らかにする。そこから、今回行われた国際的冒険プログラム体験の意味を明らかにする。

2. 研究方法

本研究においては、エスノグラフィー(小田, 2010)の視点を用いて、筆者が独自に作成した記述中心の日本語と英語のアンケートを使用した。被験者は2010年3月9～16日の期間、台湾国立体育大学とびわこ成蹊スポーツ大学が合同で行う国際的冒険プログラムに参加した学生、(台湾学生：男2名、女2名、日本学生：男1名、女1名)である。データ収集は2011年6月～11月の期間に2回のアンケートを実施した。

3. 結果と考察

本研究の結果を、国際的冒険体験による成長意欲へのプロセスとしてまとめた(図1)。参加者は、「国際的体験」、自然環境での「冒険的体験」の2つの要素を含む体験を通して、多くの気づきや学びがあったことが分かった。その主な体験内容として、以下の4つの体験の共有「コミュニケーションの難しさ」「異文化体験」「国際的コミュニティ作り」「冒険体験」があり、これらの体験を経て、体験に対してより意欲的・より積極的な取り組みができた。そうすることで、お互いを配慮し合い、意欲的に活動する集団である、「国際的・冒険的コミュニティ」が形成された。また、そのような集団では、新たな体験に対して挑戦することを互いに支え合い、取り組みやすい環境が形成された。上

記のような体験のふりかえりを通して、自己への気づき「コミュニケーションに関する学習」「積極的・意欲的な取り組み姿勢」「個人のスキル・知識」などの自身の視野の広がりを成長として自覚したことがわかった。そこから、体験後に意識した自身の目標を達成することや、自身の可能性を開花させようとする成長意欲が生成されたことが明らかになった。

4. まとめ

国際的冒険プログラムにおいては、全参加者が自国での冒険プログラムよりも、より意欲的に取り組んでいたことがわかった。また、今回のプログラム体験後に認識した自身の目標、可能性を、日常生活で開花させようとする働きがあることが明らかになった。今後、さらにプログラムを通じた参加者の成長の可能性を広げるためには、プログラムを実施する環境や様々な異文化同士での体験など幅広く検討する必要がある。

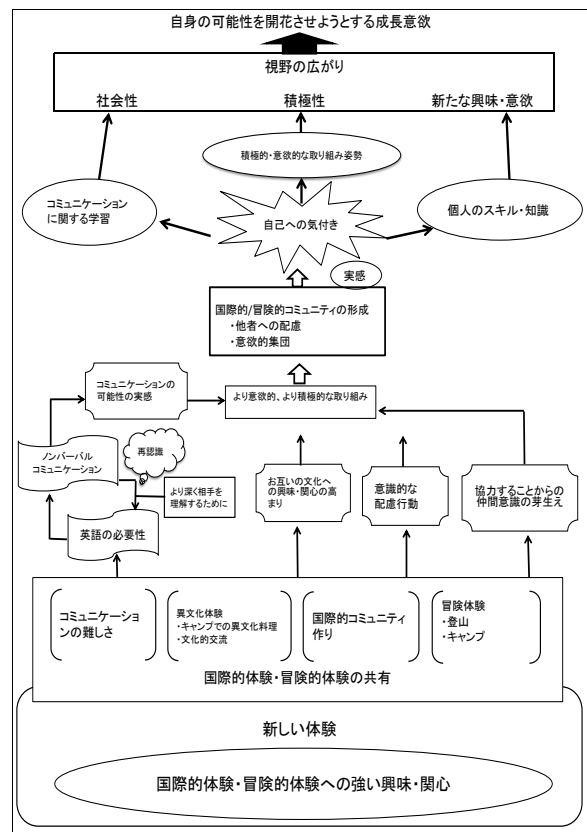


図1. 国際的冒険体験による成長意欲へのプロセス

引用文献

- 1) 劉永順(2004) 高校生の国際教育旅行の理念と現況、「観光11」P. 27.
- 2) 小田博志(2010) エスノグラフィー入門ー〈現場〉を質的研究する春秋社P. 9.